

より良い着色管理を

01



今年の品質を生産者と確認する米澤主任

10月15日から当JAのブランドりんご「飛馬ふじ」の葉取指導を行った。同日は飛馬ふじ栽培担当の農業振興課 米澤松太主任が園地を巡回し生産者に「果実に付着している葉だけを摘み取って下さい。」など葉の枚数を出来るだけ維持するよう指導していた。

近年過度な葉の摘み取りや、早いタイミングでの葉摘みが目立っている為、今年はこの巡回を行い生産者に再認識させていた。

主力品種「ふじ」
収穫本格化

02



ふじの収穫作業で賑わう園地

今年産のふじの収穫が、11月2日頃から本格的にスタートした。今年の色付きが良く、玉の肥大も良く、順調に思えたのだが、夏場からの雨が多かつた事等が原因で、糖度の上昇が昨年よりも低い事から、「糖度の上昇を待つよりも、果肉が軟質化する前に収穫するようにしましょう。」と農業振興課から伝えられた。

日本一健康な
土づくりを目指して

03

11月5日、湯口地区の溝江直雄さんの園地にて土壌分析の現地調査が行われ、日本土壌協会を始め、青森県農林水産部など関係者11名が参加した。

現地では、日本土壌協会の猪股専務理事と三浦技監が土壌の硬度調査方法や、採土の仕方、土壌分析に提出する土の取り方等の説明がされた。硬度調査には、果樹の調査に適した「山中式硬度計」を使用し、土の表面から下層に向け5cm間隔で30cmの深さまで測定する。

硬度計はmmの単位で表れ、20mm以上の数値が出ると、根が伸びていけない程の硬さになる事から、根が十分に養分を吸収できず成育不良に繋がると言っている。

今回調査した園地では、生育が良い所と悪い所で硬度の数値に差が出たことから、原因は土の硬さや、土質なのではないかと推測される。

当JAでは化学性の分析が主体で行なっている為、今回学んだことを活かして、物理性の対策も考えていきたい。



山中式硬度計で土の硬度を図る猪股専務理事



最新の貫入式硬度計に注目する参加者ら

今年で7回目のJA青森中央会が行っている企業援農ボランティア。

今年は11月7日に行われ、日本原燃株式会社や東北電力等の職員43名の参加者で過去最高であった。

コロナウイルス感染拡大対策の為、検温や消毒を徹底して開会式が行われた。

日本原燃株式会社では企業援農ボランティアの募集を掛けたところ、2、3時間で受け入れ人数に達したと言つ。その人気ぶりの理由として、相馬のりんごが美味しいという口コミが広がったことが理由ではないかと関係者は話していた。

ボランティアに参加した43名は11人の生産者の園地に3〜6人ずつ振り分けられ、それぞれの園地で作業を行った。

大半の園地では収穫作業を行ったが、その品種は様々であり、ふじを始め、王林やシナノゴールドが収穫されていた。参加者の中に

は収穫作業経験者もいれば多くは初体験の方であり、「収穫作業という作業の集大成を行っているので、丁寧に扱つようにした。手にしたリンゴ全てが美味しそうで、収穫するのが楽しい。」と笑顔で参加者は話した。

休憩中には生産者との会話も楽しく交え、中にはリンゴの一年の作業についての事や、品種の話など、りんごについての理解を深めていた。

ボランティア参加者は「普段体験できない、運搬車の運転や、皮つきのりんごをかぶりつく等の事を体験させていただき、とても楽しかった。また機会があれば是非参加したい。」と話した。

また、受け入れた生産者らもこの時期に人手が増えて作業が急加速したことにより、「とても助かった。皆さん楽しそうに作業してもらえた事がとても嬉しい。または是非お願いしたい。」と述べた。

JA青森中央会の阿保潤司課長は、「生産者と援農隊の皆さんも大変喜んでいたので、また来年も開催したい。」と話した。



収穫を楽しそうに行うボランティア参加者



大人数で反射シートの片付けもすぐ終了



美味しいと言いながらりんごにかぶりつく



初めての運搬車で楽しそうに畑の中を走り回る